直死の魔眼・ストラトス

赤ザコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
直死の魔眼・ストラトス

【Ｎコード】
Ｎ２９６９ＢＡ

【作者名】
赤ザコ

【あらすじ】
道で石につまずいて死んだと思ったら転生？よくある展開で貰った能力は『直死の魔眼』と驚異的な身体能力。よし、ランダムで選ばれる転生先はどこだ！――ってＩＳだと！？おい！能力が意味ねえぞ！！どうすりゃいいんだあああああああ！！※これは作者の妄想を組み立てた作品です。

ああ、これを不幸といわずなんという（前書き）

※この作品は作者の妄想、ご都合主義の集まりです。
それをご承知の上、お読みください　ｂｙ赤ザコ

ああ、これを不幸といわずなんという

ここはどこだ？

俺はどうしてこうなった？

目の前には装置のような、最新機器のようなもの。

周囲にはさっきまでいなかったはずの、人、人、人。

俺は目の前の装置を動かしてしまったことに後悔しつつ、目を細める。

ふむ、とりあえず自己紹介をしておきたいと思う。

俺は転生者・・・・。

多分そうだろう。

ってか、坂道で石につまずいて、そのまま電柱に激突、そして最後にトラックでバーン！

神様よ、ミスるにしてももう少しましな死に方にさせてくれないか？

痛々しい話だが、もう外見が変えられてしまったのでもう発言に責任を感じなくなっている。

いや、人は許容量以上の事実を突きつけられると、俗にいう現実逃避というやつにおちいってしまう。

俺のもそれかもしれない。

話が逸れてしまったようだね？

俺の名前は■■■■■・・・ではなく、織斑織。

俺をミスって殺しちゃった神様とやらが、転生させてくれた。

中性的な顔な顔立ちに、この世界のスパルタ姉仕込みの引き締まった体。

元の名前？容姿？そんなもの、転生の際にクソったれの神様が抹消なさったよ。

神様め・・だから化け物の類は嫌いなんだ。

いや、それよりも・・・。

よし、自己紹介に戻ろう。

そんなこんなで転生した俺は、再び神様のミス？それとも故意？のせいで不幸な目に合い、織斑家というか、織斑千冬に引き取ってもらったわけだ。

引き取られた時の年齢が幼稚園生くらいだったので（精神年齢は高校生だが・・）、早速原作にいるであろう人物たち、というかあのフラグ野郎・・・見てただけでイライラした。

一応、俺も女子受けは悪くなかったが、一夏の義理の弟というのはつらい。

年齢が同じなので双子みたいなものなのだが、それが俺の不安の要素の一つだった。

もし・・・もしだが・・・俺がＩＳを動かせる、なんて意味不明な設定だったらと思うとゾッとする。

話を戻そう。

それで、俺をミスって殺した神様がランダムで世界を選ぶけど能力は選ばせてくれると言った。

そこで俺は空の境界の主人公、両儀式（りょうぎしき）レベルの身体能力（一般人から見れば化け物）と『直死の魔眼』を頂いた。

容姿も若干式に似ているが、名前まで同じなのは（まあ、式は女のほうの名だからな）アレなので、作中に消滅してしまったほうのシ

キ、つまりは織のほうの名前を貰った。

ちなみに、『直死の魔眼』の性能は本遍と同じ性能のもので、流石にそれは『』と繋がっていないから無理がある、と俺が言うと、神様は『起源が虚無である人物を作って、そこに記憶をダークイリュージョンでトレスしたわけだから』などといってやがった。

なんという無茶振り。

流石神！

それでいける・・・のか？

ご都合主義である。

つまりここにいる俺は偽者に近いわけである。

しかし、この眼も困ったものだった。

まず、この眼の特徴としてはモノの死が見えること。

これは問題ではない。

それよりも大変だったのは死を常に知覚しなければならないので、本気で鬱になりかけたこともしばしば・・・。

こっちには魔眼を抑えるメガネなんてないからなあ。

一応、そんな辛い眼で暮らしていた俺はいつの間にか死んだような魚の目になっていた。

不安だらけだしな。

ＩＳ壊したら不味いし、目立つし。

そして、幸い？だったのが、案外平和なこの世界に飛ばされたことで、このまま緩やかに穏やかにのほほんと暮らしていきたい。

だがやはり俺の立ち位置は、それを壊しそうなものだ。

再び話を戻そう。

そんな俺の不安も、『まあＩＳに触れること自体がないからな』と思っていたが違った。

いや、一度訳ありでＩＳの装甲を壊し、修復不可能にさせたことがある。

そのせいか束さん、偉く俺のことお気に召したようでね・・・。

まあかくいう俺も束さんＬＯＶＥなわけだが。

・・・待った、今のなし。

一夏のやつがＩＳ起動させた直後に、実験とか言って俺を拉致。

男でもＩＳが使えるのか？という再確認のために複数人連れて来られた。

その中にワンサマー（一夏）もいる（というより一夏の検証でもある）わけだが、俺だけ強制だ。

そして今に至るわけなのだが・・・。

「シッキー！これはこれは流石の束さんも感動したよー！！」

「拉致の上に何この展開！！？」

横で何かウサギの耳がついたカチューシャをした女性―篠ノ之束がそう騒ぎながら俺に抱きついてくる。

周囲には人がいるのに、この人は遠慮がない。

何だかんだでこの人が俺を見つけてくれたおかげで、俺は織斑家という居場所を得たのだ。

・・・胸が当たってるし。

や、やわらかいし、・・・・大きいな。

「束ちゃーん、離れて、頼むから、離れて視線が痛いし、俺も恥ずかしいから」

まんざらでもない自分がいることを自覚する。

「ええー！照れない照れない！束さんは平気だよー？」

「僕は大丈夫じゃない！！」

俺はどこぞのコクトーのようにクールではいられないらしい。

今の俺のその手の感情表現は、どちらかといえば式に近いようだ。

と、いうより、俺は一人称を僕にしたり俺にしたりしてしまう。

安定しないなあ。

これも、俺が眼を貰ったからか？

「それよりも、これはニュースになるよーシッキー！すぐにＩＳ学園に行くことになるかも！」

「いや、束ちゃん。それは・・・僕の受験勉強はどうなるの！？せっかく名門の学校に受かったのに！？」

おい、待て。

平和にほのぼのと一夏の波乱万丈な人生を高みの見物でもするつもりなのに！

僕の人生、また死ぬわけにはいかないんだ！

なのに何ソレ。

「ちなみに、この天才束さんの実験、今も全世界で生放送中だぞ☆」

「ええ！？何その嫌なＴＶデビュー！！僕はどこまでも平凡に慎ましく、最後は家族に看取られていくようなほのぼのした人生を送りたいのに！」

「その台詞も流れてるよー」

「と、いうよりこのイチャイチャしてる光景も映されてるの！？」

直後、パシャリという音とフラッシュが雨のように連続で俺に降りかかる。

「記者まで隠れていたの！！？タバネもん！何か道具出してよ！！」

「天才束さんに任せなさい。テテテテッテテ～録音機～。さっきまでの会話も全部入ってるから大丈夫だよーどーんとぶちまけちゃおう！」

「逆に状況悪化させてる！！？しかも胸の谷間から出すとかそういうの止めろ！それよりもっといいもの出してよ！」

「じゃあじゃあ、こういうのはどう！？ＩＳ学園転入関係の用紙～」

「何が何でも僕をＩＳに関わらせるつもりか！！？」

「ふっふっふ、そういうのは諦めちゃおー！シッキーはもう有名人だよー！」

「プライバシーも糞もない世の中に絶望したぁ！！」

◆◆◆

などということがあり、ただいま俺は一つの教室の中で、一夏を横に頭を抱え込んでいた。

横の鈍感男をいつ殺してやろうか？と思考を切り替えようとするが、スクイズみたいな惨状はゴメンなので思考を中断する。

出来れば、人を見るのは極力避けたい俺。

だってこの眼は死を視てしまうから。

悩みの種である。

殺人鬼にでもなってれば、別だろうけど・・・。

「だ、大丈夫か？織？」

「うわあああああああ！大丈夫なもんかあああああ！俺は人が好きだけどさ！目立つこと＝人を見るのが嫌いなんだよ！昔確かにＩＳの装甲を完全に破壊したけどさ、この扱いはないだろ！！高校で親友作りたいなんて思った俺が馬鹿だった！横にはフラグ建築士！その周囲からは注目の的！」

「そう言えば、俺よりも目立つ報道のされ方だもんな。ところでフラグ？どういうことだ？それ？」

コイツ、本気で殺してやろうかな？

いや、それはまずい。

「どこで人生間違えたらこうなるんだよ！！」

はい、坂道で石につまずいて転んだらこうなりました。

「お、落ち着けって織！」

「よし、落ち着いた」

「早いなおい！」

うん、すぐこの学校を辞めよう。

転入してすぐにそう言い放つと俺は決める。

「いや～それにしても、織も同じでよかった」

「ん？どうしたワンサマー」

「いや、もし男が俺一人だったらな～なんて思うと不安で不安でたまらなかったんだよ」

「それに俺の同意を求めるのか？答えはＮＯだ馬鹿やろう。お前といて、俺にいいことがあったためしがねえ」

と、そこでメガネ巨乳天然癒し系キャラの山田先生が入ってきた。

コイツも地味にとなりのやつの毒牙にかかると思うと、残念でならない。

「皆さん入学おめでとう！私は副担任の山田真耶ですあ、えーっ・・・・」

自己紹介もむなしく、生徒の視線は全て一夏に向けられている。

「・・・お前もだぞ、織」

「え？マジ？・・・・あっほんとだ。不登校にでもなろうかな？」

「さらっと凄いこというな・・・・」

淡々と説明をしていく先生の話を聞き流しつつ、俺は横に居る鈍感クソ野郎と話を続ける。

そんな中、一夏は俺との話に集中しているため、原作どおりの流れに気付けないで居る。

と、ここで一夏の自己紹介タイム到着。

「えーっと織斑一夏君！」

「はいッ！？」

「クックック、お前の自己紹介、この弟は期待しているぞ？」

「というわけだから自己紹介お願いしてもいいかな？」

「え、えーと織斑一夏です・・・・」

ここで、原作通りこれ以上どう言おうか迷ってる一夏。

「じゃ、じゃあ弟さんのほうからでもいいかな？」

困っている一夏に助け舟として俺を出撃させる山田先生。

視線が一斉に俺に向けられる。

「はぁー馬鹿な兄貴だ、お前は」

「なッ！？織！」

「さて、織斑織です！特技は特になし！趣味も特になし！ああ、今日で俺この学校を辞めまｓ」

直後、目の前に見慣れた拳があった。

「馬鹿かお前は」

ギャグ補正があったためか俺はその攻撃を顔面にまともに喰らい、教室の後のほうの、空白のスペースまで殴り飛ばされる。

「どんがらがっしゃーん！！」

俺の口から出た言葉よりも、現実的には嫌な音が炸裂したわけだが・・・。

「出やがったな。化け物姉k――ッ！？」

起き上がり様にアッパーをかわし、猫のような俊敏な動きで迫る出席簿を淡々とよけていく俺。

それを放っている人物こそ、織斑千冬という、この作品上おそろしく素でも強い女である。

昔から、この姉貴はそうだった。

俺の身体能力が化け物みたいなものだから、一夏に放つような攻撃は俺には当てられない。

避ける俺も俺だが、ここまで暴力的なのもいかがと思うがどうだろうか？

「織斑先生と呼べ」

「フゥーッハッハッハ！アンタに言われたメニューをずっとこなしてた俺にそんな攻撃きかない！」

「ほう、それは感心したな（イラッ」

「え？」

一言そう言った千冬の姉貴は掃除用具が入っているロッカーから、モップを一本取り出し、不適な笑みを浮かべる。

おい、不味い。

千冬の姉貴が大きく一歩踏み込んだ。

こ　れ　は　不　味　い！

直後、俺の鼻先をモップが掠めた。

いや、直撃したら怪我するよ。

「ッ」

「なるほど、相変わらずデタラメな動きだ」

「ッ、お前が言うなってやつですよ」

俊敏な動きでモップを避けていく俺と、それに追撃していく千冬の姉貴。

少しスイッチが入りかけているらしい。

このままだと放置されている山田先生が可愛そうだ。

俺も、フルに集中してモップを見る。

先ほどよりもよりはっきりと死が、見える。

モップに走る線。

それを・・。

「一夏！俺の筆箱から物差しよこせ！」

「あ、ああ！！」

一夏は横の俺の席から筆箱を出し、さらにそこから物差しを出した。

「織！」

「よッこっせ！」

「ほらよ」

軽い仕草で投げ渡す一夏。

普通ならば、武器を取ろうとする俺を千冬の姉貴は見逃さない。

だが、見逃さないのと、撃ち落せないのは違う。

俺がしなやかな動きでそれを左手に受け取った。

「すぐ折れるだけだぞ！」

「だろうな」

見える死。

それをなぞるようにすればいい。

こんなもの、誰も信じないだろうが、それでいいと思った。

振り下ろされるモップ。

今度は俺は避けようとしなかった。

「！」

周囲が息を呑む中、物差しでモップを受け流すように切りつけ・・・・。

「まあ、こんなもんだ」

モップを粉々に粉砕した。

「す、すげえ・・・」

無言と一夏の驚嘆の声。

「・・・織斑・・・後で職員室にこい」

俺はこの時、こってりしかられる理由を作ってしまったと内心後悔していた。

◆◆◆

「ねえねえ、弟くんってさあ、千冬お姉さまから何か仕込まれてたりするの？」

「さっきみたいな動きもやっぱり織斑先生仕込み！？」

「それ以上に彼女が篠ノ之束博士だって本当！？」

休み時間。

さっきのこともあってか俺と一夏の周辺には人がかなり集まっていた。

質問攻めは覚悟していたが、予想以上に束との中を聞いてくるものが多い。

おい、どうしてお前らはそう話を飛躍させて考えるかな？

「人気者だなあ、織は」

「死ね！死に絶えろ！英語でいうとＳＨＩ・ＮＥだ！」

「それローマ字なのか？しかも英語だと輝くって意味だし・・・輝いてどうすんだよ」

「輝き死ねってことだよばーか！」

悪態をつく俺に呆れたようにため息をつく一夏。

やはりコイツは鈍感キャラなんだよな、と思ってしまう。

「ねえねえ、結局のところどうなのー！？」

「きかせてよー？あ、他に彼女いるとか？」

「ああーもう、俺は人付き合いが苦手な奴なんだよ！」

「そ、それ、ここで言うかよ！？」

「黙れ女ったらし！」

もう無理！

人が多いこの密集地帯に居たくない。

実際は人付き合いが苦手なんじゃなくて、人の死を見ることが嫌なんだ。

とくに大勢のものを見ると、今でも結構くるものがある。

「あとは任せたぞ。一夏」

「ええ？ああ。わかった」

俺は一夏に絡んできたクラスメイトを押し付け、教室を後にして屋上へ向かった。

途中、俺の姿を見た生徒が後からつけてくるのがわかったが、無視して屋上にたどり着いた。

『ねえねえ、シッキーから電話してくるとはどーいう風の吹き回しなのかなー？』

「とりあえず、人と会わずに人と会う方法ないか？人ごみは苦手なんだ」

『それは天才束さんと結婚したいというラブコールと受け取ってもいいんだねー？よーし、今から迎えに行っちゃうぞー』

「ふむ、その手の冗談でからかうのはもう止めてくれ。俺はどこぞの鈍感馬鹿と違って純粋で純情でああ、もう。一回説明しただろ？俺は異常だって」

『眼だけじゃなくてね』

「ああ、眼についての詳細は言ってないけど、これのせいで俺は・・・って眼をつぶしたところで変わらないんだけどな」

『興味深いねー、ホント。何せＩＳを刃物一つで完全に壊すことが出来ちゃうから、あの時は流石の束さんもビックリたまげちゃった』

「あれは偶然だよ偶然」

―束は俺が鬱になりかけていた頃に、いち早くそれに気付き、相談に乗ってくれたことがあり、それ以来この眼のことをほんの少し束に教え、秘密を共有しているのだ。

故に、俺に適した専用機とかをこっそり作ってくれたらしいのだが、少し心配だ。

すでにさっきの千冬の姉貴との騒動のせいで、俺の化け物クラスの身体能力はクラスメイトにばれてしまった。

いっそ篠ノ之家に貰われても良かったんだがな。
それはそれで静かな暮らしは出来ないわけだし・・・。
ってさっきから電話している俺を皆が見てる！？
「だ、だれと話しているんだろ？（ヒソヒソ」
「家族か恋人か博士か（ヒソヒソ」
「き、聞いてみる？（ヒソヒソ」
ふむ、相手まではわかっていないらしい。
『なるほど、屋上にいるけど、それでも女の子がこっちを見ているんだね？風向きからしてこっちの声は聞こえていないみたい』
「ど、どうやって理解したんだ？明らかに聞こえてないだろ？」
『え？だってそりゃシッキーの服に盗さ・・・ではなく天才の』
「ほうほう、小型の割には高性能なやつだな。おそろしいほど小型だな。でも白い制服に黒いカメラはないだろ」
服を探ってみると、黒くて超小型のカメラを見つけた。
コイツで俺の周囲を観察していたのだろう。
『・・・』

「・・・」

いや、だんまりってどうよ？

「束ちゃーーーーーン？それは肯定なのかなー？」

しばしの沈黙、そしてその後何事もなかったような明るい声が聞こえた。

『ってなわけでじゃあねー！』

そして唐突に切られる電話。

「・・・」

うわ、ひでえ。

強引に切られた電話を見ながら、ため息をつく。

「はぁ・・・」

結構普通に装っているが、なんだかんだで俺はこの眼に振り回されまくりである。

しかし、それももはやこの人のおかげか慣れてきた・・・のか？

「んー後はそうだな、俺の専用機・・・がくればいいかな」

俺の呟きは誰にも聞こえない。

少し風に吹かれていると・・・

俺は向こうのほうから篠ノ之箒と一夏がきたことに今気付いた。

原作通りのイチャイチャイベントか・・・モテ男め。

ニヤリと笑い、二人に俺は近づいていく。

「久しぶりだなあ、お二方そろってるのは・・・デートですか？」

「ッッ～～～～～～」

「なッおい、織！」

ヒュン、という音とともに竹刀が俺に向かって振り下ろされた。

「おっと、危ない危ない」

箒の攻撃をかわした俺はすばしっこい動きで一夏の横に降り立つ。

おいおい！！どこから出した？その竹刀。

「おいおい、ツンデレにしては古典的過ぎるぞ、それ」

「つッ！！？わわ、わ私は！！違ッ！！」

顔を真っ赤にされてそう言われましても・・・。

「フゥーッハッハッハ！！一夏！お前も笑え！フゥーッハッハッハ

！」

結構な速さだが、俺はそれを淡々とかわしつつ一夏にそう言う。

しかし一夏はその光景を見て冷や汗を流しながら叫ぶ。

「俺にはそんな勇気ないぞ！織！！」

「何をしている一夏！こっちを手伝え！」

「おい、箒！それは無茶な・・・」

「さっさと手伝え！（笑え！）」

「ああー！もう！六年ぶりなのに二人とも変わらなさ過ぎるだろ！！！」

頭をおさえ、叫ぶ一夏だがその叫びは箒には届かない。

「くッ！避けるな！！」

「ハーッハッハッハ！俺は天空に舞う羽！」

世紀末でしか使えないような台詞を吐きながら、俺は屋上の柵までジャンプし、その上に降り立つ。

うん、やはりからかうのは楽しい。

しかも向こうの攻撃もすべてうけきれるとなるとな。

「まあ、青春したまえ♪未来の妹よ、そして未来の姉よ♪」

「きっさっまあああああ！！」

顔を真っ赤にして向かってくる掃除用具さん。

人の恋路を邪魔するものは馬に蹴られて死ねっていうしなぁ・・・。

とりあえず俺は邪魔者らしいので消えることにする。

でも廊下は野次馬だらけだって？

じゃあ、別の道を使うか・・。

「ｓｅｅ　ｙｏｕ　ａｇａｉｎ！」

「なッ！！？」

「織！！？」

背中から落ちるように屋上から落下していった俺に、二人は驚く。

俺は落ちる瞬間に柵を蹴っていたので、クルクルと空中で回転した後、学校にある電子蛍光版のほうに体をまるめながら足をつく。

しかし、それも地面に対して垂直なものなので、落ちる前に再びそれを蹴る。

そうして、心配した二人の予想を上回り、近くにあった木のちょう

どいい太さの複数の枝につかまった。

俺の勢いに枝がしなり、ちょうど足に地面がつくくらいのところでスピードがなくなる。

それと同時にトン、と地面に降り立った俺は自分の身体能力の異常さを再確認する。

「まぁいいや（笑）」

こちらをポカンとした顔で見ている二人を置いて、俺は再び校舎の中に入る。

あの金髪も結局はデレるんだよな？（前書き）

アルバ「まさかここまで伸びるとは思わなかったぞ！？」

あの金髪も結局はデレるんだよな？

どうも、織斑織です。

今、俺はＩＳに関しての授業を受けているのだが、横にいる我が兄、織斑一夏と同じように頭の中でとてつもなく混乱していた。

それもそのはず、俺は転生者であるが、ＩＳの細かい知識までは理解していない・・・というよりも出来るはずがない。

何？あの分厚い本（参考書）を読んどけって？・・・出来るか！

「「むむ・・・むむむむ」」

今、俺の頭の中では１００人近くの小人が総動員されて授業内容を理解しようとしているのだが、

――あ、小人が一斉に血を吐いて倒れた！

ちょっとくらい、束さんの脳みそを分けて欲しいものである。

「ではここまでで質問のある人～」

山田真耶先生の笑顔が、残忍なものに見える。

「おい、一夏、わかる？」

「ぜんぜん」

「織斑くん何かありますか？」

「「っ」」

山田先生が俺たちに尋ねてきた。

いや、これは不味い。

本音は物凄く学校辞めたいです、だが・・・そう言ったらそれはそれで地獄ではなく天国を見る（見に行く）ことが出来るだろう。

主に千冬の姉貴の鉄拳で、だ。

「わ、わか」

「わか？」

理解しようと俺の頭の中の小人たちを再び・・・。

・・・・。

・・・・・・。

あれ？小人が動かなく・・・・・

小人死んだぁぁぁぁあああああああ！！

「WA☆KA☆RA☆N！」

「えーっとお兄さんのほうは～・・・」

困ったような顔で一夏のほうを見る先生。

頼む！頼むぞ一夏！俺の脳内の小人たちの仇を・・・ではなく鉄拳制裁が嫌だから回避してくれ！

「え、えーっとお・・・なら、先生・・・」

「わからないところがあったら言ってくださいね？私は先生ですから」

うお、千冬の姉貴から凄まじい怒りを感じる。

平常心のように見えるけど、あれは絶対内心怒ってるよ・・・。

気まずそうに一夏は手を挙げ、それに笑顔で返す山田先生。

「ほとんど全部わかりませーん！」

「え・・・？全部ですか？」

「なぁ、織もそうだろー？」

「今の段階でわからない人いますかー？」

山田先生、そういうの俺たちだけだから。

「・・・・・・・・・・お前ら、入学前の参考書は読んだか？」

「「え？あの分厚いやつですか？」」

「そうだ、必読と書いてあっただろう？」

「もちろん！ストレス発散に破り捨てましッ――ぐふッ！！？」

「馬鹿かお前は・・・おい、織斑（兄）お前は？」

凄まじい衝撃だったぞ？

出席簿が武器になるなんて、こんな話聞いてない！！

罠だ！――これは罠だ！

じゃなくて・・・。

「間違って捨てm――うああッ！！？」

うん、やっぱいい音だ。

「二人とも、後で再発行してやるから、一週間以内に覚えろ。いいな？」

「いやッ！一週間であの厚さはッ！」

「いや、俺を舐めるなよ、千冬の姉貴！こんなもの！卒業するまでかかるぞ！」

「やれといっている」

キラーン☆と効果音を付けたいくらい、その眼は光った。

いやはや、姉って恐ろしい。

「無ｒ――ぐほッ！！？」

そして再び否定しようとした俺は殴られる。

「織、千冬姉には逆らわないほうが・・」

「俺は、退かぬ！媚びぬ！省みぬ！ってぐぼふッ！？」

「駄目だこいつ、早くなんとかしないと・・・」

◆◆◆

休み時間っていいよね？

面倒な授業のことも忘れて、ゆっくり出来る時間だし。

俺の頭の中の小人も休ませて上げられるし。

でも、ここでは俺たちに休みはない。

「ねえ、聞いてますの？」

横には金髪美人がいて、しつこく話しかけてきている。

そして周りには野次馬の美少女たち。

ワーオ☆何その楽園！とか思った奴、頼むから変わってくれ。

「聞いてますの！？」

無視、無視っと。

って・・・これ以上は不味い。

向こうの怒りが結構たまってるぞ・・・。

「ふむ、君誰？」

「なッまあまあ、その反応は何ですの？このわたくしに話k」

「僕は織斑織っていうんだけど、君は？」

ふむ、猫かぶりもいいところだよ、俺。

「なるほど、正しい判断ですわ！心してお聞きなさい！私の名前はセシリア・オルコット！イギリスの代表候補生ですわ！」

「ふむ、セチリア・オルコッツか」

「セシリア！セシリア・オルコット！ですわ！わざとですの！？」

「失礼、かみました」

「わざとですの？」

「かみまみた」

「わざとじゃないっ！？」

おい、一夏。

いつの間に会話に入ってきた？

しかもそのツッコミ！凄いなお前！

「垣間見た」

「俺の才能の一端をか！？」

「本気で見ちまったじゃねえか！この野郎！！！」

すっげええ！コイツ凄い！流石主人公！！

いやいやいや！こっちの世界にはあの作品ないからな！？

よし、話を戻してやらねば・・・・セシリアが口を開いてポカーンとしているではないか。

「だ、代表候補生ってなんだ？」

一夏が俺より先に会話に入る。

あ、俺意外の野次馬とか全員がずっこけた。

「日本の男性というのは皆これほど知識に乏しいものなのですか！？」

「？」

話の腰を斧で寸断した感じだよ、お前！
ここは素晴らしき弟（笑）が助けてやらないと。
（笑）ってなんだよ。
「では教えてさしあげm」
「おい、雑種！この我(オレ)が直々に教えてやらんこともないぞ？」
「おお、織！頼む！！」
「なっ・・！」
スマン、セシリア・・だってお前の話長いもん。
「国の代表の候補・・・言い換えるとオリンピック出場選手候補のようなものだ。わかったか？雑種？」
「お、おう・・・凄いんだな」
「そうですわ！エリート中のエリートですわ！」
「エリンギ中のエリンギだとよ！一夏！」
「貴方絶対からかってますわね！？」
ちなみに言っておくけど、俺、ＩＳ経験一夏と同じだからな？
もし勝負になるようなことがあったら、この眼と身体能力があって

も厳しいんじゃね？

からかうのはやめておこう。

ネタバレだけど、コイツ結構な努力家で俺嫌いじゃないし・・・。

「んで、確か入試で教官を倒したんだったよな？」

「そうですわ！教官を倒したのはこの私一人ですもの！覚えられているのも無理はｎ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官。しかも織だって」

ここで空気の読めないやつ発動。

俺はこの眼と身体能力（とはいっても素質を貰っただけだからここまで鍛えるのに苦労したんだぞ？）で教官の武器を全て破壊してやった。

やはり肉弾戦のほうが簡単でいいや。

斬り合いならＩＳ相手でも自信あるし。

「な、何ですって！！？あ、貴方も教官を！？私一人だけと聞いていましたのに！？」

「女の中でってオチじゃぁッぐふッ！！？」

一夏をとりあえず黙らせて・・・。

「そこまで驚くことじゃないだろ？」

「これが驚かずにいられますか！！」

ち、面倒くさいなあ・・・。

顔が近づけられるのは苦手なんだ。

「ＨＥＹ落ち着けハニー！その話をここでするのは野暮だぜ！と俺は俺は落ち着くよう促してみたり！」

「～～～～ッ！何か周りに勘違いされてしまってるじゃありませんか！！？」

ふむ、野次馬に誤解を招いてセシリアが目立ってるけど・・・どうしよ。

略。

ここで運よくチャイムの音が鳴り響く。

音を略すな！

しかしナイスタイミングである。

「チャイム？」

「ＣＯＯＬタイミングだぜ！良かったなあ旦那！」

「織、お前大丈夫か？」

うん、実に結構無茶してるよ？俺。

「お、先生がきたぞ」

「くっ！この話はまた後でしますわ！」

やっべ、最初から印象悪いなあ・・・。

よーし、ならこの学園で一夏のフラグを片っ端から・・・今まで無理だったのに出来るわけないよなー・・・。

一人だけフラグいじれたよ？けど、出番まだまだだし、ここではあえて言わないで置こう。

とりあえず、部屋ってどうなるんだろ？

◆◆

ハーレム、って言葉を誰かが言った。

俺の顔ってさ？式似だから、女子からみても悪くはないんだけど・・・。

あんまり今、嬉しくない。

「さ、先が思いやられる・・・」

「モグモグ・・・（ゴクリ！）ふみゅ、確かにこれは不味いよなあ

（飯はうまいぞ？）」

「まるで見世物みたいだ。そう思わないか？織」

「動物園のパンダの気持ちがわかるぞ、あ、俺動物園行ったことないや！」

「そういや、お前・・学校の遠足とかでも動物園だけは避けたよな～」

そりゃそうじゃ！だって俺の眼の性質上、死が見えるからな。

可愛い動物たちの死なんか見に行っても笑えないだろ？

すまんな、未来の俺の彼女。

動物園デートは一生無理だろう。

「っと寮についた・・・」

「おい、一夏！部屋割り表はどうなっている？」

「えーーーっと片方が空き部屋で片方が誰かと同じみたいだ」

「ってこれ、相手のほうも俺たちも名前書いてないじゃん！１０２５室は、誰かと同じ部屋はお前ね、はい決定！」

「おい！織！いくらお前が人見たくないからって！それはないだろ！！？ってここは男二人の部屋がいいだろ！？」

ふむ、これはこれはまたまたおかしいですな。

男二人一緒の部屋、というのがが寮としては普通なのに俺と一夏を分離するのは流石におかしい。

いや、男二人だと悪巧みすると考えたのか？または・・・・。

え？俺？

俺はそんな変態なことしないよ。

一夏を結果としてそうなるようにおちょくりまくるだけだけど。

俺も一人はさびしいけど、お前の未来の嫁のために我慢我慢。

「さびしいならお前がこの部屋に行け！！」

心の一部が読まれた！？

「そ、そんな！？一夏は俺に不登校になれというのか！？」

「いや、どうしたらそうなるんだ・・・」

地味に本気でいやな俺。

「・・・兄貴のクセに・・譲りもしないのか・・・・」

「なッ・・・それ言うのはズルイだろ！？このニート体質！」

「うるせえ！ここばかりは譲れないんだよ！Ｍｒ．鈍感！」
俺は箒の裸に興味・・・あるっちゃあるかな？俺も男だし。
でもそれが許されるのはコイツだけだろうよ。
「こういう時は早いもの勝ちだ！！」
とりあえず別の部屋に向かって、俺は並々ならぬスピードで走っていった。

◆◆◆

「・・・で、何でこの部屋についてる電話に電話できるの！？ってか何で知ってるの！？」
部屋の電話を取りながら、俺は呆れたようにため息をつく。
『いやいやーそりゃ束さん、天才だからさー。シッキーのや箒ちゃんの部屋ぐらい、全部把握してるよー！最近、箒ちゃんの胸の成長も凄いからねーふっふっふ・・・何気なくシッキーもロックオンだよー♪』
「な、何だと！？プライバシーもクソもないじゃん！クソッ！！多分カメラとか仕込んだだろ！？どこに置いてんだ！？」
探してみるが、カメラらしきものは見つからない。
そりゃそうだ、だって束さんだよ？天才だよ？

『一つじゃないしそう簡単には見つからないって～だって束さん、少し本気だしちゃったし～。シッキーも素直じゃないねー。シッキー、素直になっちゃいなよ～』

「素直になるよ・・・僕。束さんを愛してる！って言うかあああああああああああああああああ！ふざけるなあああああ！！」

『うんうん！シッキーは面白いよ！』

「え！？そんだけ！？僕のプライバシー侵害する理由そんだけ！？」

相変わらずこの人ひどい！

まあおそらく、向こうの一夏は箒とのイベントで箒のバスタオル姿を拝んでいるのだろうが、こっちはそんな甘いものはない。

義理だけど兄弟なのにそこらへんの采配ひどくない？

『まあ、まあ、落ち着きなよ』

「これが落ち着いていられるかあ！！」

『それはそうと、シッキーの専用機をそっちに送りつけたよー』

「！！」

おい、それが本題か。

・・・というより、まさか束さんが強引に部屋を用意したんじゃあ・・・。

ヒャッホー！束さん、愛してる！というのはまあ冗談だけどな。

『いいよいいよー！もっと褒めて褒めてー』

「って心の声までわかるのかよ！！？」

それ　よ　り　も。

「性能は？」

『ＩＳの中では攻撃力最悪レベルだね』

「いや、俺に攻撃性能はいらない。それよりも欲しいのは」

『超高速の移動、でしょー？いやはや、この天才束さん！ひそかに作ってた紅椿よりも速さだけなら上を行くやつを作っちゃったんだよー！』

「えげつねえスピードじゃねえか？それ・・・」

『スピードに関してだけなら最高の機体だけど、攻撃性能と防御性能は普通過ぎるよ』

それでも普通なのか。

天才凄い。

俺が束さんに言ったことは一つ。

『相手に俺が一撃喰らわせられれば、攻撃性能など関係ない』というようなことだ。

この天才はそれに答えてくれたのだろう。

「攻撃を避けるか防ぐかは俺次第ってことか？」

『そうなるねー』

へぇ、それだと結構面白いパワーバランスになるなあ。

「で、色は？」

気になったためにきいてみた。

いや、だってさ・・・。

『うん、白と黒の機体だよー！』

まさか、神様も関わっちゃいない・・・よな？

わかる人こそわかる衝撃である。

「じゃあ、その機体の名前、俺が決めてもいいかな？」

『えー』

「えー、じゃない」

『しょうがないなあ、シッキーは～』

「はは、じゃあ言わせて貰おう」

一息つき、言う。

起源と、もう一つの存在を。

「俺の名じゃない、『虚無(シキ)』だ」

その名は、最近俺が自覚し始めた存在だ。

◆◆◆

翌朝。

ふむ、俺、シリアスになってしまったな。

基本こんな感じなんだけどなあ。

「それにしても、束さん、俺の母だよ」

「ま、また連絡とったのか？仲いいな、織」

横には俺が知る中でもっとも鈍感な主人公がいる。

今は朝食をとるために食堂で飯をゲットし、席を探しているのだが・

・・・。

「それにしても、俺の母ってどういう意味？」

「・・・俺の母→我が母→我がママ→ワガママ→ワガママ！！」

「・・・・・・・・」

「ワガママ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

くっそう、朝からすべった。

「固まるな！どうせ箒のバスタオル姿でもお前は拝んだんだろーが！」

「どうしてわかるんだお前！！？ま、まさか見てたのか！？」

「悪い、勘だ」

「うわあああああああああ！誘導尋問！！？」

まぁ、おかげで箒さん、恥ずかしがってなさる。

そんな箒の横に一夏が座り、その横に俺が座る。

「おいおい、箒どうしたんd」

「名前で呼ぶな！」

「あ、ああ、スマン」

「あーツンツンしてるねえ・・・」

「織斑君、隣いいかな？」

「・・・、いいよ」

出た！三人組み！

一人なんかピカチュウみたいな服きとるし・・・。

のほほんさんこと布仏本音は、見ているだけで心が癒される。

！

今尻尾みたいなの動かなかった！？

「うぉっ、織斑君ってもの凄い食べるんだー」

「男の子だね」

「横の鈍感よりは燃費がいいぞ？」

「ってか弟君のほうって、出来るだけ人と顔合わせようともしないよねー。照れ屋さんなの？」

「・・・ま、まあそんなところだ。俺は違うが、ハーレムをハーレムと思わないやつこそハーレム。そう思うだろ？」

「「「ほうほう・・・一理ある、かも・・・」」」

コイツら、仲良くなれそうだ。

「何吹き込んでんだよ、織」

「ほら、コイツが女の敵。覚えた？」

「「「そ、そうなの？」」」

「・・・ってよく朝飯それだけで足りるよな～」

ぬ、一夏め・・・話題変えやがった。

「わ、わたしたちは・・・ねぇ？」

「うん」

「お菓子、よく食べるし！」

うお！？

またのほほんさんの服の尻尾が！？耳も！！？

す、すげえよのほほんさん！

「私は先に行くぞ、一夏」

「うっわー怒ってるよ」

さっさとトレイを戻して食堂から出て行く箒。

一夏、お前にはほんと呆れたよ。

「ねえねえ、織斑君たちと篠ノ之さんって仲いいの？」

「幼馴染という間柄らしいぞ？」

「お前もだろ、織」

パンパン、と手を鳴らす音が聞こえた。

げ、千冬の姉貴！

「いつまで食べてるー？朝食は迅速に効率よく取れ！私は一年の寮長だ！遅刻したらグラウンド十週させるぞ！」

「まあ、俺はそれぐらいどうってことないんだけどな！」

「お前に限っては千週だ！」

「すいません、ちゃんと食べます」

◆◆◆

「ふう～、相変わらず姉貴は怖い怖い☆」

「そんなお前を、俺は素直に尊敬するぜ・・・」

「おい、そこ！うるさいぞ！」

千冬の姉貴の言葉に、俺たちは口を閉じる。

あの話がくるな～。

「再来週に行われるクラス代表戦の出場者を決める！」

その後に、生徒会に関われるとか？色々姉貴は説明していく。

「まあ、クラス長と考えてもらっていいだろう。自薦他薦は問わない誰かいないか？」

「はい！！！」

俺はここで手を挙げる。

「・・・織斑」

あれ？何か間があったぞ？

まぁいいや（笑）

「一夏君を推薦します！」

「なッ！？なら！俺は織を推薦します！」

なッ・・・馬鹿な！？

ま、不味い。

って頭を抑えるなよ千冬の姉貴。

「じゃあ織斑君二人を推薦します！」

「私もー！」

「じゃあ私もー！」

「私も！」

「織斑君二人を推薦しまーす！」

畜生ゥ。

「おい、他に意見はないのか？このままだと、この兄弟の予選になるぞ？」

「「おい待て！それは納得がいかな」」

「納得がいきませんわ！」

「良いね、そういうの、俺は大好きだ」

セシリアが机を叩きつけながら立ち上がる。

「男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！このセシリア・オルコットに一年間そのような屈辱を味わえと！？」

ふむ、何かイラッとくる発言だよなあ・・・。

「全く、喰いついてくるのはいいけど、相手を選べよ？男は皆ズルイなんてお前の幻想なんだからさー？」

「な、何ですの！？」

「あーあー、人の価値観にアレコレ言う気はないけど、歪んだ価値観だよな。お前、最高にダサいよ」

「ッ・・・！だ、大体！文化としても後進的な国に暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で！」

我ながら少し感情的になってしまった。

いつものＣＯＯＬな俺に戻ろう。

と、そこで一夏は言う。

「イギリスだって、たいしたお国自慢ないだろ。世界一不味い料理何年覇者だよ？」

コイツ、怒るトコずれてる。

いや、確かに俺も自分の国否定されたら腹立つけどさ？

「まぁ、不味いからな・・・というか食文化がないって言ったほうがいいか？」

「そうなのか？」

「ああ。アメリカとかイギリスって、料理とかであんま名前でないだろ？フランスとかイタリアとかはよく出るけど」

「ああー、なるほどな」

完全にセシリア無視。

やるな、こいつ。

「美味しい料理はたくさんありますわ！」

「世界的には評価されてないけどな」

「貴方たち、私の祖国を侮辱しますの！？」

・・・式が鮮花を好いている理由が少しわかった。

何か面倒くさい。

よし、一夏に尋ねよう。

セシリアに聞こえないようにな。

「ふむ、祖先から続いてる血のつながりは？」

「血統」

「血液中に含まれている糖分の種類は？」

「血糖」

「じゃあ、互いの尊厳をかけて闘うことは？」

と、ここでセシリアが腕を振りかざし、俺たちを指差した。

「決闘ですわ！」

（パーフェクト！）

「おーいいぜ！四の五の言うよりわかりやすい」

地味に感動している俺と笑いをこらえる周囲。

いやーいいタイミングだよ。

だけど、一夏の野郎、流れを理解していない。

流石鈍感。

ってちょっと待て。

「えーっと・・・その決闘、俺も？」

「当然ですわ！」

「なッマジかあ！？」

「・・・はぁ」

一夏・・・テメエ、一発殴らせろ！

「わざと負けたら二人とも、私の奴隷にしますわよ？」

「じゃあお前が負けたら一夏専属のメイドな？」

流石に、裸エプロンはどこぞのマイナスではないので言えない。

しかもこの場所でそれを言うと、下手するとセクハラになってしまう。

「なッ！」

地味に驚いているセシリアを前に、一夏は本気でうろたえていた。

なんじゃこの鈍感野郎・・・・・。

「・・・お前は死ね！」

「なッ！？」

とりあえず罵声を浴びせた俺だった。

あの金髪も結局はデレるんだよな？（後書き）

工場長「感想、待っているぞ！（主に蒼崎から）」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2969ba/

直死の魔眼・ストラトス

2012年1月9日01時48分発行